



日本語とモンゴル語における補助動詞の対照研究

巴徳瑪

(Degree)

博士（学術）

(Date of Degree)

2012-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5518

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005518>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目

日本語とモンゴル語における補助動詞の対照研究

氏 名 : 巴德瑪

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 高梨信乃 准教授
(副) 鈴木義和 教授
(副) 松本 曜 教授

要旨

本研究は、モンゴル語母語話者の日本語学習上での困難な点の一つである日本語の補助動詞を取り上げて、モンゴル語の補助動詞と対照研究し、相互の共通点と相違点を究明して、最終的にモンゴル語母語話者の日本語学習上での問題点を解決することを目的としたものである。モンゴル語の補助動詞と比べて、日本語の補助動詞の研究が遥かに進んでいるため、本研究では、日本語の補助動詞の本研究での位置付けに従って、モンゴル語の補助動詞と対照研究を行った。

第1章では、先ず日本語とモンゴル語の補助動詞を対照するのに、基礎的な内容である文法化について記述した。それから、日本語の補助動詞の定義、補助動詞の構文形式、日本語のアスペクト及び動詞の分類について述べた。文法化とは実質的な意味を持つ内容語に意味の希薄化が発生し、機能語的な意味・機能を持つようになることである。日本語とモンゴル語の動詞において、一部の動詞が文法化によって補助動詞になっている。日本語の補助動詞はアスペクトの意味、移動の意味、もくろみの意味、やりもらいの意味を表す。そこで、本研究では、主に前三者の意味を表す「テ」形補助動詞を研究対象として、それに対応するモンゴル語の補助動詞と対照研究を行った。

第2章では、モンゴル語の動詞の分類、補助動詞の定義及び、補助動詞の前接動詞との接続パターンである結合型「-ju/jü,čü/čü」,分離型「-yad/ged」,同時型「-n」の特徴について記述した。モンゴル語の動詞の分類において、本研究では、主に内蒙古大学中国語学文系蒙語教研室(編)(1964)に従い、モンゴル語の動詞を一般動詞(eng-ün üile üge),代動詞(tölügen üile üge),補助動詞(tusalaqu üile üge),接続動詞(qolbuqu üile üge)の四つに分類し、補助動詞を「モンゴル語の一部の動詞が動詞の語彙的な意味を失い、文法化し、他の動詞と副動詞語尾で結合し、様々な文法的な意味を表すものである」と定義した。

また、モンゴル語の補助動詞の前接動詞との接続パターンである、結合型「-ju/jü,čü/čü」,分離型「-yad/ged」,同時型「-n」の特徴及び関連性についても記述した。①この三つの接続パターンは基本的に、結合型「-ju/jü,čü/čü」が並行性を表し、分離型「-yad/ged」が順次性、原因理由を表し、同時型「-n」が同時性を表す。②動作主及び前後の動作の関係によって、結合型「-ju/jü,čü/čü」と分離型「-yad/ged」,又、結合型「-ju/jü,čü/čü」と同時型「-n」は相互に関連性を持ち、相互に入れ替えることも可能である。③三つの接続パターンの動詞との結合の強弱度合いは同時型「-n」>結合型「-ju/jü,čü/čü」>分離型「-yad/ged」である。④分離型「-yad/ged」と同時型「-n」は同じ動詞が重複し、反復又は副詞的な意味を表すのに対し、結合型「-ju/jü,čü/čü」にはこの用法が存在しない。

第3章では、日本語の補助動詞「～ている/てある」とモンゴル語の補助動詞「bayiqu」とを対照し、相互の類似点と相違点を考察した。日本語の補助動詞「～ている」とモンゴル語の補助動詞「bayiqu」の結合型「-ju bayiqu」とは「動作の継続」、「結果の持続」、「単なる状態」、「反復」を表す面で共通点を持っているものの、「経歴」を表す面で異なっている。一方、日本語の補助動詞「～ている」とモンゴル語の補助動詞「bayiqu」の分離型「-yad bayiqu」とは「結果の継続」、「反復」を

表す面で共通しているものの、「動作の継続」、「単なる状態」、「経歴」を表す面で異なっている。日本語の補助動詞「～ている」が基本的な意味を表す場合、モンゴル語の補助動詞「bayiqu」は前接する動詞のタイプ及び接続パターンによって異なる意味を表す。

- ①前接動詞が主体動作・客体変化、又は主体の意志的な動作を表す他動詞及び過程を持つ主体変化動詞の場合、モンゴル語の補助動詞「bayiqu」は結合型「-ju bayiqu」が「動作の継続」を表し、分離型「-yad bayiqu」が「結果の持続」を表す。
- ②前接動詞が主体の意志的な動作を表す自動詞、ものの非意志的な動き、及び心理動詞の場合、結合型「-ju bayiqu」は「動作の継続」を表すが、分離型「-yad bayiqu」は使用できない。また、前接動詞が状態動詞の場合、結合型「-ju bayiqu」は「単なる状態」を表すが、分離型「-yad bayiqu」は不自然である。
- ③「反復」と「経歴」の派生的な意味を表す場合、結合型「-ju bayiqu」と分離型「-yad bayiqu」は共通点を持っている。

一方、日本語の補助動詞「～である」とモンゴル語の補助動詞「bayiqu」とは「結果の持続」、「効力の残存」を表す点で概ね一致している。ただし、モンゴル語の補助動詞「bayiqu」は前接する動詞との接続パターンによって、表現する意味が異なる。

- ①前接動詞が主体の意志的な行為、且つ瞬間的な行為を表す動詞の場合、日本語の補助動詞「～である」は「結果の持続」を表す。他方、モンゴル語の補助動詞「bayiqu」は結合型「-ju bayiqu」と分離型「-yad bayiqu」の両方の接続パターンで「結果の持続」を表現できる。
- ②前接動詞が主体の意志的な行為、且つ過程を持つ動詞の場合、日本語の補助動詞「～である」は「結果の持続」を表す。他方、モンゴル語の補助動詞「bayiqu」は結合型「-ju bayiqu」が「動作の継続」を表し、分離型「-yad bayiqu」が「結果の持続」を表す。
- ③日本語の補助動詞「～である」は主体の意志的な行為を表す動詞に後続し、「効力の残存」を表す。この場合、モンゴル語の補助動詞「bayiqu」は結合型「-ju bayiqu」が「動作の継続」を表し、日本語の補助動詞「～である」と相互に対応しないが、分離型「-yad bayiqu」は日本語の補助動詞「～である」と相互に対応し、「効力の残存」を表す。
- ④前接動詞が主体の意志的な動作を表す動詞であり、且つ抽象的な動きを表す動詞の場合、日本語の補助動詞「～である」は「効力の残存」を表す。他方、モンゴル語の補助動詞「bayiqu」は分離型「-yad bayiqu」が「効力の残存」を表すのに対して、結合型「-ju bayiqu」は座りの悪い文になる。

第4章では、日本語の補助動詞「～てくる」「～ていく」とモンゴル語の補助動詞「irekü(くる)」「yabuqu/očiqu(いく)」とを対照分析し、その共通点と相違点を考察した。日本語の補助動詞「～てくる」「～ていく」とモンゴル語の補助動詞「irekü」「yabuqu/očiqu」の意味・用法は概ね対応している一方、相互に対応しない点も存在することが明確になった。また、日本語の補助動詞「～てくる」が「～ていく」より文法化の度合いが高いのと同じように、モンゴル語の補助動詞「irekü」も「yabuqu/očiqu」より文法化の度合いが高い。

日本語の移動動詞「くる」と「いく」は方向が違っただけで、表現している意味はほぼ同じである。だが、補助動詞として文法化されたとき、その異同点はかなりはつきりしてくる。補助動詞「～てくる」「～ていく」が補助動詞として空間的移動の意味を表す場合、それらの意味機能は同じである。それに、アスペクト的な意味—変化の進展の過程を表す点でも共通点を持っている。しかし、補助動詞「～てくる」は話し手に向けられた言語行為を表すが、補助動詞「～ていく」にはこの用法が存在しない。また、これは動詞「くる」、「いく」の語彙的な意味の違いから発生した相違点であるが、補助動詞「～てくる」は発生を表すのに対し、補助動詞「～ていく」は消滅を表す。

一方、モンゴル語の「行く」を表す移動動詞「yabuqu」と「očiqu」とを比較してみると、動詞「yabuqu」の意味機能は内容語と機能語とのいずれの働きをする場合でも動詞「očiqu」に比べて広い。さらに、補助動詞「irekü」と「yabuqu/očiqu」とが空間的移動の意味を含意している場合、結合型「-ju/jü,čü/čü」と分離型「-yad/ged」との両方の接続パターンが見れるが、動詞の意味が希薄化し、アスペクトの意味を表すようになった場合、その接続パターンは結合型「-ju/jü,čü/čü」のみになる。

第5章では、日本語の補助動詞「～ておく」とモンゴル語の補助動詞「talbiqu」とを対照し、二つの補助動詞の異同点を考察した。補助動詞「～ておく」と「talbiqu」とは類似点を持つものの、相違点も存在していることが考察できた。特に、モンゴル語の補助動詞「talbiqu」は文法化があまり進んでおらず、「ものをある場所に置く」という実質的な意味が強く残っている。そのため、動作の結果の状態としてある物、またはその物の状態が目に見える形で存在する場合において、動詞「talbiqu」は補助動詞として使用することができる。一方、対象が人であり、効果や効力しか存在しない場合においては補助動詞として使用することができない。それに、モンゴル語の補助動詞「talbiqu」の前接動詞は他動詞であるのに対し、日本語の補助動詞「～ておく」は自他動詞の両方に使える。よって、日本語の補助動詞「～ておく」の文法化の度合いがモンゴル語の「talbiqu」に比べて高いということが言える。

第6節では、日本語の補助動詞「～てみる」とモンゴル語の補助動詞「üjekü」とを対照した。日本語の補助動詞「～てみる」とモンゴル語の補助動詞「üjekü」は「試行」を表す点においては共通しているものの、「経験」を表す点においては異なっている。それに、「新たな認識・理解を得る事態を体験すること」を表す用法において、日本語の補助動詞「～てみる」は前接動詞が意志的な行為、或いは条件によって無意志的な行為を表す動詞の場合に使用できる。これに対し、モンゴル語の補助動詞「üjekü」は意志的な行為を表す動詞の場合のみである。

一方、モンゴル語には視覚を表す動詞が「üjekü」と「qaraqqu」の二種類ある。二つの動詞は「目で見る」という意味を表す点で類似しているものの、意志性があるか否かの点で異なっている。動詞「üjekü」が表す意味の範囲は動詞「qaraqqu」より広く、機能語としても様々な文法的な意味が表現できる。だが、動詞「qaraqqu」は内容語のみの意味を表す。

本研究は、日本語の補助動詞の本研究での位置付けに従って、モンゴル語の補助動詞と対照研究したものである。今後の研究では、これまでの内容を一層深く探ると同時に、本研究結果を日本語教育上でどのように活用していくのかを研究していきたい。

論文審査の結果の要旨

氏 名	巴 徳 瑪
論 文 題 目	日本語とモンゴル語における補助動詞の対照研究
要 旨	本論文は、日本語とモンゴル語の補助動詞を対照研究し、相互の共通点と相違点を究明して、モンゴル語母語話者の日本語学習上での問題点の解決に貢献することを目的としたものである。全体は6章から構成されている。 第1章「日本語の補助動詞」では、まず、考察の前提となる文法化の概念について述べている。文法化を「実質的な意味を持つ内容語に意味の希薄化が発生し、機能語的な意味・機能を持つようになること」と定義した上で、日本語と同様に、モンゴル語においても一部の動詞が文法化により補助動詞になっていることを確認した。さらに、日本語の補助動詞が表す文法的意味がアスペクト、移動、もくろみ、やりもらいに分類されることを確認し、本論文では前三者の意味を表す「テ」形補助動詞を研究対象とし、対応するモンゴル語と対照することを述べた。 第2章「モンゴル語の補助動詞」では、まずモンゴル語の動詞全体を概観した上で、補助動詞を「モンゴル語の一部の動詞が語彙的な意味を失い、他の動詞と副動詞語尾で結合して、様々な文法的な意味を表すもの」と定義した。続いて、補助動詞の前接動詞との接続パターンに、結合型「-ju/ju, cu/cu」, 分離型「-Gad/ged」; 同時型「-n」の3種類があることを紹介し、それぞれの特徴について概観した。 第3章は、「日本語の補助動詞「～ている/てある」とモンゴル語の補助動詞「bayiqu」の対照」である。日本語における「～ている」と「～てある」にあたる対立はモンゴル語には見られず、「bayiqu」が両方の領域を担っている。一方、モンゴル語には補助動詞に複数の接続パターンが存在するため、接続型による意味の表し分けが見られる。以上を踏まえた上で、前接動詞のアスペクト的なタイプごとに、日本語の「～ている」「～てある」と、モンゴル語の結合型「-ju bayiqu」および分離型「-Gad bayiqu」で表される文法的意味を詳細に検討した。その結果、たとえば結合型「-ju bayiqu」は「動作の継続」、「結果の持続」、「単なる状態」、「反復」を表す面で「～ている」と共通するものの、「経歴」を表せないという点で異なるなど、両言語の異同が明快に整理された。 第4章は、「日本語の補助動詞「～てくる」「～ていく」とモンゴル語の補助動詞「irekU(くる)」「yabuqu/ociqu(いく)」との対照」である。日本語の「～てくる」「～ていく」には空間的移動やアスペクトなど多様な意味・用法があるが、モンゴル語の「irekU」「yabuqu/ociqu」の意味・用法は、日本語に概ね対応している一方、対応しない点も存在することが明確になった。また、日本語の「～てくる」が「～ていく」より文法化の度合いが高いのと同様に、モンゴル語の「irekU」も「yabuqu/ociqu」より文法化が進んでいることがいくつかの根拠のもとに明らかにされた。 第5章は、「日本語の補助動詞「～ておく」とモンゴル語の補助動詞「talbiqu」の対照」である。「～ておく」の表す意味は「動作終了後の状態の保持」、「動作中の状態の保持」、「間接的な効果・効力」の三つに分類されるが、「talbiqu」には後二者の用法がないことが明らかにされた。その理由は、「talbiqu」の文法化の度合いが比較的低く、「ものをあて場所に置く」という実質的な意味を強く残しているためであると説明される。また、「～ておく」が自動詞・他動詞のいずれにも接続するのに対して、「talbiqu」の前接動詞は他動詞に限られることも、両者の文法化の度合いの違いを表すものとして指摘された。
主査記載 氏名・印	鈴木 義 和

第6章は、「日本語の補助動詞「～てみる」とモンゴル語の補助動詞「UjekU」との対照」である。「～てみる」と「UjekU」は「試行」を表す点においては共通している。しかし、「～てみる」がもつ、無意志動詞に接続して「新たな認識・理解を得る事態を体験することを表す」用法は「UjekU」には存在せず、逆に、「UjekU」には「～てみる」にはない「経験」を表す用法があるといった相違点が指摘された。

本論文では日本語とモンゴル語を対照するにあたり、主として日本語の補助動詞の研究の知見と枠組みを用いて分析・考察が進められている。これはモンゴル語の文法研究、わけでも補助動詞の研究が進んでいないことから必然的に選択された手法だと言える。しかしながら、両言語の基本的な文法構造が類似していることもあり、この手法は有効に機能し、モンゴル語の補助動詞の記述・考察が大きく進展した。それに加えて、モンゴル語との対照によって、日本語の補助動詞研究にも新たな視点が与えられたことも見逃せない。本論文はもともとモンゴル語母語話者の日本語学習上の問題点解決に寄与することを目指したものであったが、それにとどまらず、日本語母語話者のモンゴル語学習にも役立てることが可能であろう。

以上のことから、審査委員会は全員一致で、論文提出者巴徳瑪が博士（学術）を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	鈴 木 義 和	副 査	准教授	矢 田 勉
副 査	教授	松 本 曜	副 査	准教授	高 梨 信 乃
副 査	教授	萩 原 守			